ヒマラヤ・スケッチ紀行 ―― 落馬始末記 ――

札幌市　田　中　敏　明

予定より一日遅れでジョムソン空港に着くことになった私は、タラップを降りるとすぐにゲート周辺の人垣に眼をやったが、やはり、ラジュンの姿はどこにもなかった。

群がり寄ってくるポーターたちを振り払うようにして通りに出ると、私は急ぎ足でマルコポーロに入っていった。

マルコポーロはパルサ（茶店）を兼ねた安宿で、空港も近くジョムソン街道に面して建っている。

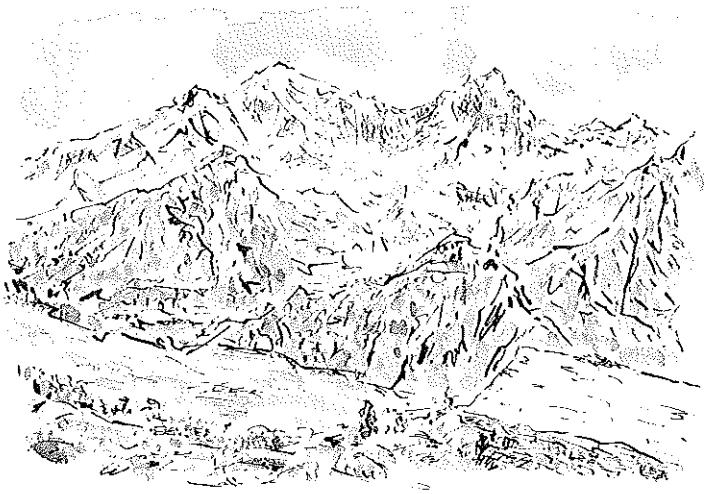
この春、友人と二人で初めてトゥクチェを訪れた際にも、このマルコポーロに立ち寄って、ここのアマ（女主人）にポーターを選んで貰ったし、帰りにはラジュンと三人で一泊もした。

旅慣れぬ者にとっては特に頼りになるアマだから、今回もまっ先に立寄って、何かと相談相手になって貰うことにしたのである。

アマは話してくれた。やはり、ラジュンは昨日早朝からやって来て、一番機、二番機、三番機と、不定期に飛来するポカラからの空の便を迎えながら、私の到着を待ちつづけていたということ、最終便がポカラへと飛び立っていった後も、このマルコポーロにやって来て暫くは待っていたということを。

申訳ない。私は自分の不注意から彼との約束を守れなかったことを悔いた。

カトマンドゥに着くとすぐに、11月7日のポカラ発ジョムソン行の航空券の手配をしたが買えなかった。やむをえず6日の夜、トゥクチェにたった一つあるという電話を頼りにして連絡をとろうとしたが、皮肉な



ナウリコットの丘よりニルギリを望む

ことにこの電話が不通だった。私にはどうしようもなかった。

トゥクチェはジョムソンからカリ・ガンダキ河沿いに南に約11キロほど下った所にある村で、いわゆるジョムソン街道の一拠点で、かつてはチベットとの交易でかなり栄えたらしいが、今はその面影はどこにも見当たらない。

ネパールの航空事情を日本のそれと同じように考えて、ジョムソン着を7日と決めてしまったこと、遠く離れたトゥクチェから歩いて来るラジュンに出迎えを頼んでしまったこと、いずれもが軽率なことだったのである。

この春、ラジュンの家に一週間も滞在しお世話になったにもかかわらず、ブバ（父親）のスッパさんは、是非と差し出す私たちの謝礼を、けっして受け取ろうとはしなかった。それどころか、かえって私たちに土産にしろとロキシー（ネパールの焼酎）まで贈ってくれたのであった。

私は恐縮した。そんなスッパさん一家に何かお礼をしたかった。

スッパさんはリンゴ園を持っている。冬季の果樹手入れに必要な剪定ばさみが手に入りにくいと知って、私はその剪定ばさみを日本で買ってお礼に贈ろうと心に決めて帰国した。

札幌に戻ると早々に老舗の「宮文」を訪れ最上級の品を買い求めた。次いで、自分の使い慣れていた剪定ばさみを「宮文」で研いで貰い、それぞれにケースを付けて、改めてトゥクチェを訪れる場合の土産にする準備をした。

再訪の旅はこの秋にしようとすでに心を決めていた。リンゴの収穫が終わる頃までに何としてもこの二丁の剪定ばさみを届けたいと考えたのである。スケッチ旅行を兼ねて今度は独りでヒマラヤの旅をしてみようとも、思っていたのである。

ジョムソンからトゥクチェ・タトパニ・ゴラパニを経てポカラに至る、約八日間にわたるトレッキングの計画も組み入れた。ラジュンに手助けして欲しいと連絡もして置いた。

春の旅につづいて今回も、ヒマラヤの花や山のスケッチも必ず幾枚かは描けるものと、楽しみにして日本を再び出発して来たのであった。

悔んでも仕方がない。元気を出してトゥクチェに行こう。行ってラジュンに謝らなければ、私はそう思って私のリュックを運んでくれるポーターのことをアマに相談しようとした。その時、ふと来年の7月にヤクの放牧場のあるマルチェ・カルカに馬に乗せて連れて行ってあげると言ったスッパさんの言葉を思い出した。

トゥクチェが標高2600米近く、マルチェ・カルカは4000米を越えると思われる。7月は雨季のさ中、放牧場は見渡す限りの高山植物のお花畑が出現し、東にはアンナプルナ（8091米）を主峰とするアンナプルナ・ヒマルールの諸峰を、西にはダウラギリI（8167米）を主峰とするダウラギリ・ヒマールの諸峰を、それぞれ仰ぎ観ることができるとのこと。

三日間程仕事で滞在するが、私にはスケッチだけしていなさい、コックはラジュ

ンがやるし、歩かなくてもよい、馬で行くからと言うスッパさんに、私は即座に同行したいと申し入れて置いたのであった。

私にはまだ乗馬の経験がなかった。そうだ、マルチェ・カルカ行きの練習に、今日はいい機会だからホース・トレッキングをしようと考えた。

でもラジュンが眼の前にいたら、ホース・トレッキングすることなど考えもしなかっただろう。なぜなら、彼が私の重いリュックを背負ってトゥクチェ迄歩いてくれるのだから。

ホース・トレッキングをしたいと、マルコポーロのアマに相談した。暫く待てと言ってアマは外へ出て行った。

私はミルク・ティを注文し、アマの帰りを待つことにした。ネパールのミルク・ティやブラック・ティはどこで飲んでも美味しいと私は思った。

やがてアマが帰って来てOKと言った。馬は前払いで700ルピー、リュックを背負うポーターは後払いで300ルピーで契約した。(1ルピーは約2円)

なお、馬方が付いてサブ・リュックを無料で背負ってくれるという。馬方は10歳くらい、ポーターは15歳くらいの、どちらも感じのよい少年だった。ネパールの子供たちは小さい時から皆働き者ばかりである。

途中の昼飯を少年たちに振舞ってくれと、アマは私に言った。出発前に茶代を払おうとしたら、アマは要らないと言った。

先ずはマルコポーロの前の石壇を利用しての乗馬となった。私は鐙を踏ん張り、腰を据え、胸を張った。馬方の少年が私に手綱を握らせ、両手で鞍の前部をしっかり掴むように言った。

ナマスティ(さようなら)。見送ってくれるアマたちに別れを告げ、馬上の旅人となった私は、二人の少年とともに、ジョムソン街道を南へ、ラジュンの待つトゥクチェへと出発した。

蹄の音につれて体が揺れる。風もなく穏やかな天気だ。ジョムソンの人通りの多い所を通り抜けるまでは何となく面映ゆい気がした。

馬上の眺めがすばらしい。爽快だ。風景が一変するのだ。カリ・ガンダキの渓谷はより深くより広く、峙つ両岸のヒマラヤはより嶮しくより高く聳えて見える。

幾組となくすれ違っていく隊商の馬の列を見下ろしながら聴く鈴の音が澄む。大きな荷を背負って行くネパールの人々。必ずといっていいほど男女のペアで旅する外国人。所どころで筵を拡げ民芸品を売るチベット人たちがいる。

馬方が先頭で馬を引き、ポーターが後から馬を追う。私たち三人の旅もこの街道の風景の中に溶け込んでいた。

街道とは云っても名ばかり、他のヒマラヤの山道とさほど変わるわけではない。時に坂を登り、時に川を渡る。時に崖を伝い、時に河原に出る。紆余曲折果てしない石の道をカリ・ガンダキ沿いに南へと下って行った。

ジョムソンを出発してからは、もうラジュンのことを忘れていた。馬上に在る人はマルコポーロを訪ねた人と別人だった。

こんな快適な旅は初めて。この街道は行

政上はムスタン州に入る。以前、テレビで観たムスタン王国の話を想い出すと、他に馬上の旅をする者も見当らぬ、何となく今自分がムスタン王となって、悠々馬上の旅をつづけているように想えてきた。

ムスタン王が馬上から見下ろす風景はさらに格別だ。いい気分の旅がつづいた。

だが、「驕れる者は久しからず」とか、即製ムスタン王の夢は当然のことながら、敢えなく潰え去ってしまった。

一時間も歩いた頃、馬が滑石で蹄を滑らせて、あっという間もなく転倒、王は激しく石だらけの路上に叩きつけられた。滑石の一つで右脇腹を強打、声も出ぬ、ただただ呻き蹲くのみ。

少年たちが駈け寄って私を助け起こそうとした。しかし、激痛で体を動かせぬ。気も遠くなりそうだった。通りがかりの人や村人が集まって来た。

気が付くと外人トレッカーが身を屈めて心配そうに声を掛けていた。大丈夫かと尋ね、病院のことも口にしていたが、私には彼の話し掛けてくる言葉を、激しい痛みの中では十分に聴きとることもできなかった。

彼は私の手に一粒の薬を握らせた。痛み止めの薬に違いないと思った。すると、たぶん彼の奥さんであろうと思われる女性がミネラル・ウォーターのボトルを差し出した。私は幾度もこの二人の外人に礼を言った。

やっと一息つくと、少年たちの手を借りて、何とか再び馬上の人となると、気づかう村人たちに見送られながら出発した。

ポーターは私には、左の手で手綱と鞍の前部を、右の手で馬の尻がいを、がっちりと掴ませた。

これではムスタン王には似つかわしからぬ乗馬姿と思ったが、落馬は命取り、命あっての物種と少年の指示を素直に受け入れることにした。

分不相応の思い上がりに天罰が下ったのに違いない。ムスタン王の夢は落馬と同時に消え、替わって王の奴隷にされてしまったような暗うつな気分と苦痛が私を支配していった。

街道筋のあちこちでリンゴ園を見かける。もうほとんどが収穫を終えていた。

馬方の少年は民家の軒先に馬を停めると、下馬しようとする私を制して、家の内に入って行った。玄関の石壇の上には小粒のリンゴが一籠とククリ（腰刀）が置いてあった。

やがて少年は胸に黄色の大きなリンゴ1個と小粒のリンゴ数個を抱えながら出てくると、大きなリンゴの方を私にくれ、自分は小さい方を齧り始めた。

私はククリを取って、貰った大きなリンゴを二つに割いて、半分をポーターの少年に手渡した。

私は皮のまま半分のリンゴを齧った。軟らかくて甘い！　芳香が漂う。リンゴの実にいっぱいに詰められていた自然の甘味が、溢れてこの芳香となっているに違いない。こんな甘いリンゴは日本では食べたことがない。

好天の日が多く、昼間高温で夜間急激に冷え込んでゆく、このヒマラヤの大きな温

度差が、こうした自然の糖分をたっぷり含んだ甘い果実を産み出すのだろう。

リンゴの木の原産地はヒマラヤと聞いていたが、ヒマラヤは日本の北海道や青森・長野に勝る甘いリンゴの特産地でもあったのだ。

少年に貰ったリンゴで少し元気づいたような気がした。実はこうしたリンゴも雇い主の私が買って振舞うべきものだったのであろうが、この馬方の少年は自分の馬のせいで、客の私が重傷を負ったことを気づかって、特別に私にリンゴを買ってくれたのに違いない。

私はこの少年の優しい心づかいを嬉しいと思った。そうして、この少年はもう立派な大人だ、と思った。

少年は残りの小粒のリンゴを馬に与えた。馬はいかにも美味しそうに喰い始めた。

途中、マルハのパルサでミルク・ティとビスケットを注文した。昼飯には早い時間なので、トゥクチェに着いたら少年たちに昼飯代とチップを払おうと考えた。予定では12時半頃には着くはずと判断した。

怪我をしてから2時間余り、馬上でひたすら痛みに耐えた。とにもかくにも早くラジュンの家に辿り着きたい。想いはただそれだけだった。

いったん、カリ・ガンダキの河原に降りて進み、再び河岸段丘に上がって、山鼻を大きく右に廻ると、もうそこはトゥクチェだった。

やっと辿り着いたラジュンの家、玄関先の石壇に馬を寄せて貰うや、私はそのまま石壇の上に転げ落ち倒れてしまった。暫くは起き上がれなかった。

ポーターの少年がラジュンを呼んでくれた。私は倒れたまま、ひたすら申訳なかったと謝った。昨日からずっとラジュンは怒っていたに違いないと私は想った。

ブバのスッパさんは大事なリンゴの商いで、歩いて五日もかかるポカラに行っており、いつ帰ってくるのか分からないという。

私はがっかりした。あの陽焼けした髭面のスッパさんの白い歯が零れるような笑顔が見たかった。やはり、時期的にも無理のある旅の計画だったのだ。

ポーターの少年には後払いの300ルピーと、昼飯代とチップの200ルピーと合わせて500ルピーを、馬方の少年には昼飯代とチップの200ルピーに、馬の昼飯代にと50ルピーを加え計250ルピーをそれぞれ手渡した。

馬にはリンゴを買って喰わせてくれと頼んだ。私は途中で見せた馬方の少年の優しさに、感動し応えるとともに、馬が転倒した原因も、緑の草などの少ない今の季節、飼料不足で人間を乗せて歩くのに十分な力が出なかったからではないかと思ったのである。

二人の少年には厚く礼を言って別れた。

部屋に入ってラジュンと話をしている間に少し痛みが和らぎ元気が出てきた。

今日は村のゴンパ（仏教寺院）の祭りの最終日だから、二人で見物に行っておいでと、ラジュンのアマ（母親）は勧めた。

まだ歩くのは辛かったが、ラジュンのバジェ（祖父）とバジャイ（祖母）の家に挨拶に立ち寄り、神戸のフルクマリさん（ラ

ジュンの叔母）から預かって来たものを届けた後、ラジュンと一緒にゴンパの祭りに出かけた。

ゴンパには沢山の幟が立てられ、賑やかな笛や太鼓の音が聞こえていた。仏を拝観し賽銭箱に５ルピーを納めた。ゴンパからの村の眺めがよかった。

ラジュンが山の上のリンゴ園に行ってみないかと誘ってくれた。春、二人でリンゴの花をスケッチし、写真も撮った想い出の場所、ニルギリの諸峰がよく見える。まだリンゴも少しなっていると彼は言った。好意が嬉しく、無理をしても登ってみようと思い、私は応じたが雨が落ちてきたので中止した。

自分の怪我がどんな状態なのか知りようもなかった。体の表面には傷も痣もなく、内部から発する痛みだけは治まりそうもないのが不安だった。

予定のポカラへのトレッキングに未練はあったが、無理はすまい、思い切って予定を変更し、明日はジョムソンに引き返そうと考えた。

この件をラジュンに話した後、その夜は泊めて貰うことにした。家の仕事は忙しそうだったが、彼がポーターを引き受けてくれることになった。出発は６時と決めた。できるだけ早くジョムソンに着いて、明日のポカラ行、更にはカトマンドゥ行の航空券を確保したいと思った。

その夜、傷は痛むし体は動かせず、ほとんど眠れなかった。長すぎる夜がやっと明けた。ラジュンの家の二階の窓から見える白いニルギリの峰々も、何となく今日が見納めのように思えて辛かった。

６時はまだ暗く、出発は８時に延ばされた。ラジュンが運んでくれるミルク・ティやレモン湯が美味しくて何杯も何杯もお代わりをした。

出発前、ラジュンは湿布薬を何枚も貼ってくれた。済まないと心の中で謝った。ネパールでは医薬品が乏しく、どんな薬でも貴重なのだ。

アマが私にプレゼントすると言いながら、幾十日もかけて手織った美しいカーペットを丸く捲いて差し出した。私はこれは嵩張って大きな荷物になるとは思ったが、アマの好意を嬉しく思い、ダンニヤバード（有難う）と言いながら両手で受け、アマのプレゼント大切にしますと言って深々と頭を下げた。

出発前、先ずバジェとバジャイの家に別れの挨拶に行くと、バジャイは私の首に白い絹のマフラーを掛けて結んでくれた。これはシェルパ族に伝わる古くからの風習で、この白い絹の環のように、どうか元気で無事に、再びここに還っておいで、という祈りをこめて旅人を送り出すのである。

送る者も送られる者も、共に合掌しナマスティ（お元気で・さようなら）と言いながら別離する。熱いものがこみ上げてくる。

ラジュンの家に戻ると、アマとラジュンのスワニィ（嫁）がそれぞれ白い絹のマフラーを私の首に掛け結んでくれた。ナマスティ、やはり涙が滲んできた。

ラジュンはアマのプレゼントのカーペットを上に縛った私の大きなリュックを背負い、サブリュックまでも持ってくれた。私

の持つ物はカメラ2個だけ。それでもそのカメラが私には重荷だった。

右脇腹の傷を庇いながら歩くため、左脚の筋が痛み始めた。この方が歩くと辛い。歩きながら次第に弱気になってゆく自分がそこにあった。

こんな怪我をするようでは、あの嶮しい山道を馬で登降せねばならぬマルチェ・カルカは、自分には到底無理なことだと思えてきた。

マルチェ・カルカの夢が遠のいてゆくにつれて、今回でネパール・ヒマラヤの旅も最後だなと思いはじめていた。もうマルチェ・カルカの夢を諦め、これからは、年齢相応体力相応に、山歩きは自分の好きな北海道だけにしよう。そんなことを思いながら私は黙ってラジュンの後について歩いていた。

ラジュンは何度も何度も、振り返り、立ち停まり、遅れつづける私を待ってくれた。途中の風景も昨日にもまして心に残ることはなかった。早くジョムソンに、マルコポーロにと思うが、どうにもならなかった。

5時間かかって、やっとマルコポーロに辿り着いた。マルコポーロのアマは私の落馬と怪我のことを知っていて心配していた。昨日、ジョムソンに戻った少年たちが、すべてをアマに報告していたのだろう。アマの顔を見ると私は少し元気になった。

早速私は明日のポカラ行の航空券の手配をアマに頼んだ。アマに命じられて使に出て行ったボーイはすらりとした25・6歳のやさしい眼の印象的な青年だった。

すぐに戻って来た彼はOKと言った。アマは私に50ドルを払うように言った。青年は再び出かけて行くと、今度は航空券を手にして戻って来た。カトマンドゥ行はポカラで買えるから心配するなとアマは言った。

嬉しかった。歩いたり動いたりしなければ傷の痛みもさ程でもないし、左足の痛みも全くない。これなら明日の昼前には元気でカトマンドゥに戻れるし、うまくゆけば、明後日午前0時15分の直行便で帰国できるかも知れない、そう思うと私の心は弾んだ。

ラジュンと二人で昼食をとった。2時頃だった。ラジュン有難う、僕は大丈夫だからもうトゥクチェに帰ってもいいよと言った。スッパさんが留守だから家の仕事が忙しいに違いないと思ったのである。すると、ラジュンは即座に、ノー、明日の朝タナカサンを見送る迄居るよと答えた。有難う、ラジュン、済まないね、宜しく頼むよ、私もそう答えた。

アマは私に、部屋で少し眠るといいと勧めてくれた。ベッドに横たわる際辛そうにしている私を見て、心配しながらラジュンが手助けをしてくれた。

順調に運べば明後日には帰国できるかも知れないという希望が生まれた安心感と、昨夜の寝不足と、今日のトレッキングの疲労が重なったせいか、私は眠りに就いていた。ラジュンは外に出て行ったようだった。

眼を覚ますと、日が暮れてしまったのか部屋の中は薄暗かった。ラジュンも外から戻っていた。

またラジュンの手を借りて起き上がりト

イレに立った。用を済ましたとたん、急に寒気がして震えが襲ってきた。アマもラジュンもボーイも、皆心配してベッドの傍に集まって来た。熱があったのかも知れない。

アマが心配してドクトルを呼ぼうかと言った。初め、私にはドクトルの意味が判らずとまどったが、すぐに、マンボウを想い出し、ああ、そうかと合点し、ノーと答えた。すぐに治まるだろと思ったし、こんなヒマラヤの山の中に医者は居るはずもないと決め込んでいて、仮に居たとしても、それは怪しげな薬草を煎じ、経文を唱えながら治療をする僧侶では、とも思ったのである。(これは失礼なことでした。申訳なく思っています。)

アマはどこが痛むのか、どこが苦しいのかと、しきりに尋ねた。やがて、背中や脇腹、胸のあたりが痛むことを知ったアマは、哺乳びんのような容器の中にタトパニ(熱い湯)を詰めてきて、それで胸から脇腹、更に背中と、マッサージを繰り返してくれた。タトパニの温もりが体に伝わってきて、寒さや、寒さから来る体の凝りや疲労が次第にとれ始めた。

今度は、アマに代わってラジュンが休むことなくマッサージをしてくれた。少し楽になって暫くまどろんでいたが、再び痛みが激しくなってきた。

後で想い起こしてみると、昨日落馬したとき、外人トレッカーに貰った痛み止めの薬の効き目が切れてしまったのかも知れなかった。

私は観念した。どんな医者であれ、大事に至らぬ前に治療をして貰えば楽になるかも知れぬと思った。

私はアマにドクトルは居るのかと尋ねると、居ると答えた。早速、ボーイが使いに走った。戻ってくると暫く待つようにと言った。

夜の9時頃、やっとドクトルが往診に来てくれた。40歳くらいの恰幅のいい人で、日本のドクトルよりも立派に見えた。

アマの話によるとカトマンドゥの大きな病院から派遣されて来ているドクトルだとのこと。

手ぎわよい打診・聴診を終え、痛み止めと睡眠の薬を処方してくれ、カトマンドゥに着いたら、レントゲンを撮って精密な検査をして貰うようにと、病院の案内のパンフレットを渡して帰って行った。往診料は意外な程安くほっとした。

その夜は、ドクトルのくれた薬でよく眠れた。時々眼を覚ますと、いつもラジュンは起きていて、私が寝返りを打つのを助けてくれたり、辛そうにしている時には、しきりとマッサージをしてくれた。

深夜、私は眠らずに看病してくれるラジュンに、およそ次のような事を話した。

ラジュン、有難う。私は君のお陰で、明日には、何とかカトマンドゥに戻れる。更にうまくゆけば明後日には日本に帰れるだろう。今日、君に運んで貰った荷物はかなりの重さだった。それに、カトマンドゥのホテルにもまだ荷物がある。これらの荷物の全部を、空港に着く度に、独りこの体で運ぶのはとても無理だと思う。ついては、君にお願いがある。今朝、ラジュンのアマから頂いたプレゼントのカーペット、私の

大切なカーペット、せっかくここまで運んで貰って申訳ないが、もう一度、トゥクチェの君の家に持ち帰って預かって置いてくれ。この怪我を治したら、今度は自分の荷を軽くして、必ずカーペットを頂きに行くからそれまで預かっていてくれ。宜しく頼む。

それから、スケッチブックも絵の具も、全部君にあげよう。暇があったら絵を描いてごらん。むつかしいことは何もないんだ。君が見た通りに描けばよいのだから。花でも牛でも君の家でも何でも描いてごらん。君が君のブバやバジェの年齢になったら、きっとトゥクチェの村も大きく変わっているだろう。今の美しい村の様子を何でも描いて置くといい。ゴンパでも学校でもリンゴの木でもカリ・ガンダキでも何でも。でも、君にとって一番大切なものは君の家族だろう。家族のためにブバやアマを助けて、一生懸命仕事をして暇ができたら次に絵を描くんだよ。ポストカードもあるから、それに絵を描いてごらん。絵が描けたら切手を貼って送ってくれ。他には何も書かなくてよい。僕は君の絵を見るだけで君が元気で居ることが分かるから嬉しいよ。それから、シュラフザックもサブザックも君が使ってくれ。このジャンパーはブバにあげてくれ。頼んだよ。せっかく運んでくれたものを、また運ばせてごめんね。家に帰ったら、くれぐれも皆さんに宜しく伝えてくれ。

長々と話すと、ラジュンは大きく肯いていた。

話し終わると、私はそのまま眠ってしまったようだ。

10日の朝6時半、まだアマの姿は見えなかった。ミルク・ティとみそスープを飲んで、アマに宜しくとボーイに伝言して、マルコポーロを後にし空港に向かった。ラジュンとボーイと二人で私のリュックを運んで、空港での手続きもすべてやってくれた。

ボデー・チェックを受けた後、私は独り待合室に入ってロイヤルネパール機の到着を待つことになった。狭い待合室は外人トレッカーでごった返していた。

30分程してふとゲートの方を見やると、ラジュンが心配そうに私の方を見つめていた。視線が合うと彼はにっこりして手を振った。私も手を振って応えた。

暫くして待合室にマルコポーロのアマが姿を見せた。私の怪我を心配し見送りに来てくれたのだった。私は思いがけないアマの好意に涙が零れそうだった。嬉しかった。

普段、使用人を使う時のアマは、時に厳しい言葉を発することがある。だが、旅の者、特に私たちのように心細い思いで旅をしている者には温かく優しいアマなのだ。

私はアマに向かって合掌し、ダンニヤバード、リターン・カムバック・ジョムソン（こんな英語あるのかどうか知らない）と言うと、アマは何？　といった気配を見せた。間髪を入れず、マルコポーロと付け加えると、アマは了解したというように、必ずマルコポーロに帰っておいで、と言った。ダンニヤバード、再び涙が零れそうになった。

こんなに有難く嬉しく切ない出逢いと別れが他にあるのだろうか。私は必ずもう一度マルコポーロに戻って来ようと自分に誓い、待合い室を出て行くアマの後姿を見

送った。

7時半過ぎ、私の搭乗するロイヤルネパール機が2番機として到着した。今朝のジョムソン空港はよく晴れていて、南に聳えるニルギリ・ノース(7061米)が見事だった。せめて1枚と、カメラを構えていると、ラジュンが空港の中に駆け込んで来て、ノー・ノー早く乗れと私をせき立てた。ラジュンは最後の最後迄、私を見守り、心配していてくれたのだった。

さようなら！　ラジュン、また会おう。私は見送ってくれる彼に別れを告げ、エンジンの轟音とともに、ポカラに向かって飛び立って行った。

一時間後、ポカラ空港でカトマンドゥ行の航空券の購入手続きをしているところを、トントンと肩を叩かれた。振り返ると、そこにあの陽焼けした髭面、白い歯が零れるような笑顔があった。思わず駆け寄って両の手で固い握手を交わした。

スッパさんは商いの合間を見て私の見送りに来てくれたのであった。会いたかった。嬉しかった。

スッパさんは右脇腹のあたりに手をやって、落馬して怪我をしたんだって、といった身振りをして白い歯を見せた。とっさに私は了解した。テレホン？　と尋ねると、スッパさんは2度肯いた。

私がジョムソンから飛び立った後、ラジュンがスッパさんに電話をして、私が怪我をしたことと、ポカラ空港に着くということを知らせてくれたのだ。

私も、スッパさんも、お互いラジュンの場合のようなコミュニケーションの言葉がない。それでも何となく気脈相通じるところがあるように思う。

スッパさんと別れて、再び機上の人となって、左方に展開するヒマラヤの山々を、ぼんやり眺めながら、嬉しいスッパさんとの先程の再会の場面を想い返していた。

スッパさんが私に、落馬してここを怪我したんだって、といった身振りを想い出した時、私は笑みがこぼれてくるのだった。

そういえば、春、スッパさんが馬から落ちて、ここが痛い、湿布薬はないかねと尋ねていたのを想い出したのだ。

あの時、スッパさんのような、いわば、ヒマラヤ育ちの逞しい男でも落馬することがあるのか、と思ったが、今は、スッパさんと私は落馬の友になったなと思った。

心が軽く弾んでゆく中で、怪我の痛みも薄らいできたなと思っていると、早くも、ロイヤルネパール機はカトマンドゥ空港に着陸する態勢に入っていた。

怪我のため、苦痛を抱え、一枚のスケッチも描けぬまま、遽しい帰国をしなければならぬ旅ではあったが、ラジュンをはじめ、マルコポーロのアマ、外人夫妻、少年たち、そうして、ラジュンの両親に、ボーイたちの温かく優しい心に包まれて、幸せな旅、嬉しい旅、いい旅ができたと思う。

生涯忘れることのないネパール・ヒマラヤの花を心の奥深くに描くことができた、有難い旅だったと思う。

元気になったら、今度は馬に頼らず、自分の脚でしっかり歩く、感謝のヒマラヤの旅をしてみたいと思っている。